

推 薦 状

濱田洋子先生は、獣医大学の病理学教室を卒業された後、他の病理検査ラボで3年近く勤務され、難波ラボにて2年半ほど在籍されました。

難波ラボでは、病変の構造を肉眼的・顕微鏡的に見る組織診と呼ばれる解剖病理学的な活動とともに、細胞診と呼ばれる、病変内から構成細胞だけを針などで吸引し細胞の形状などから病変の構造を推測する診断業務に携わってこられました。

またそれとともに、当ラボで病理診断された症例について、その後どのような生活を過ごされたかメールや電話にて聞き取り調査を行い、なかでも、病院での検査では子宮蓄膿症と判断されてしまう危険もある、致命的なネコの子宮腺癌について日本獣医がん学会にて講演されたほか、悪性中皮腫や悪性リンパ腫の病理診断について、医学領域での病理診断との比較を行いながら、動物病院の先生方へ提示する資料を作成するといった仕事にも鋭意取り組んでいただきました。

2013年4月からは、難波ラボにおける病理診断書に診断書作成者として署名をいただくようになりましたが、その時点から退社されるまでの間には、組織診で948症例、細胞診で790症例が記録されております。

一般的に遭遇する症例につきましては所長の難波が主にあたり、難解な症例などを集中して担当していただきましたので、多くの貴重な経験を積まれたものと確信しております。

一方、診断書に署名のない症例であっても、顕微鏡観察を行い診断書の文面を記述していただいた症例や、難解であったり、まれな症例などを見ていただくことは多く、2年半強の在籍期間中の難波ラボ内の症例数は23595例を数えます。

病理学の学習にも終点はありませんので、今後ますます研鑽を積まれることと推察いたしますが在籍年数に足る、十分な経験と学習をされてきたものと考えます。

加えて、謙虚にして聡明な人柄は高く評価されるもので、私どもとしましては、先生が難波ラボを卒業されるにあたり、独立を喜ぶ気持ちとともに大きな喪失感を抱いております。

今後は、難解症例の検討会を行うなど互いに連携をとりながらそれぞれより良い病理診断を行っていただけるようにと祈念しております。

平成26年1月

難波動物病理検査ラボ 代表
フランス獣医解剖病理認定医
日本小動物がんセンターアドバイザー
日本獣医がん学会病理部会員

難波 毅之